

氏 名（本 籍）	礪 波 美和子	（大阪府）
学 位 の 種 類	博士（文学）	
学 位 記 番 号	博論第121号	
学位授与年月日	平成16年 6 月17日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当	
	人間文化研究科	
論 文 題 目	『西行物語』の展開の諸相	
論文審査委員	（委員長） 教授 千 本 英 史	教授 井 口 洋
	助教授 大 谷 俊 太	助教授 加須屋 誠

論文内容の要旨

本論文は、平安末期に活躍しその後の和歌史に大きな影響を与えた歌僧西行の動静を語って後々の西行像を作り上げた『西行物語』の多岐にわたる諸本について、現在に残るおよそ50本を調査し、その相互関係と展開について論じたものである。

『西行物語』には多くの写本・版本が残されているが、それらには、天理図書館蔵『西行法師集歌』（A一）のように和歌の詞書程度の文のみで成り立つ作品から、書陵部蔵文明12（1480）年本（B三）のように『宝物集』などを典拠とし、仏教教理を説く場面が多く含まれる作品まで、また文字のみで描かれる冊子体のものから、多くの絵を含んだ絵巻の形で伝えられるものまで、多様な形態・内容のものがある。したがって、『西行物語』は、その多種多様な伝本ゆえに、単純・一律に論じることができない。

従来は、もっとも記述分量が多く、最多の和歌を含み、書写年代のはっきりしていることから、先述の書陵部蔵文明12年奥書本のみが論じられることが多かった。

さらに諸本を考慮にいれた場合でも、先学により翻刻・活字化された本文に頼りきって論を進める傾向も見られた。しかしながら、活字化されたものは、翻刻者の方針により、推敲・訂正のあとを示す見せ消ちなどの情報が省略されたり、見やすいように改行・一字下げなどが施されたり、現在一般に使用されている漢字仮名混じり文に訂正した釈文のみを掲げていたりし、当然ながら、原本自体を見ないとわからない事項が少なくない。

本論文は、各本の内容、筋、詞章の相違の程度により、階層的に分類するという、故松本隆信氏の

方法に立ち戻り、諸本を分類し直し、個々の伝本について、特徴・差異に注目しながら検討を加えることによって、各伝本の位置付けを行ない、それぞれがいかなる特徴を持つかを考察したものである。

本論文は全体として、大きく「論文編」と「資料編」の2分冊に分かれたれ、論文編には4部および附考、計14章の論文、資料編には諸本の翻刻25編を収める。

本文編の第一部「西行の和歌と旅」は、同じ西行を登場人物とする説話集『撰集抄』と比較し、また西行の詠じた和歌及び旅について考察して、『西行物語』の特質を明らかにしようとした4章からなる。

第一章『西行物語』と『撰集抄』－和歌の扱いを中心に－は、『西行物語』において、西行の和歌が筋の骨格をなし、話の結びの役割を果たすことに着目し、『西行物語』が、構造として歌集における詞書と和歌との関係を残していることを述べている。それに対し、語り手として西行を仮託する『撰集抄』においては、語り手はことからの見聞者に徹していて、自ら和歌を詠じる場面は数えるほどしかなく、他人歌を「語り手詠」とすることも多いことに着目し、語り手西行が各地で見聞したことを書き記し結縁をなすことに重点を置いていけるとする。

第二章「西行の和歌観をめぐって」は、西行の和歌に対する同時代人の評価と『沙石集』等で紹介される西行の和歌観との関連を考察した。その上で、『撰集抄』において、語り手西行が和歌を詠じる場面が数えるほどしかなく、しかも語り手が詠じた和歌のうち実際の西行の詠んだ歌が半数にもみないのは、『撰集抄』編者が語り手としての西行に求めたものが、「生得の歌人」としての西行ではなく、心を澄ます一手段として和歌を捉え後世を願う西行であったためと考えられるとする。

第三章『西行物語』における和歌観をめぐって」は、第二章での分析に対し、多種多様な伝本を有する『西行物語』諸本における和歌に対する考え方を比較検討している。その上で、吉野・熊野・大峰への修行の旅の記述がない《甲類》諸本は、和歌を詠ずる西行とその西行の往生に対する素朴な感動を描くことを意図したものと考えられるのに対し、《乙類》諸本は、和歌を詠ずることを仏道修行と捉え、その修行に読者を導くという意図を様々な度合いで付加したものと考えられるとする。

第四章「西行の旅」は、天竜川の渡しの場面を中心に、『西行物語絵巻』諸本の絵と詞書を比較検討する。その上で、現存する歌集にのる西行の和歌の詞書では、旅に対する言及がパターン化されており旅のつらさや大変さは記されていないこと、西行を語り手に仮託する『撰集抄』においても個々の説話の中に移動の困難さを記す話がないことに着目し、後世の阿仏尼や芭蕉が旅の途中「心細し」と思い起こした西行の旅のイメージは、『西行物語絵巻』に基づくのではないかと考察している。

第二部は、『西行物語』の原型を考察した二章からなる。

第一章「天理図書館蔵『西行法師集歌』について」は、従来、和歌を中心にした抜書本とされ、等閑視されてきた天理図書館蔵『西行法師集歌』について分析を加え、同書には、伊藤嘉夫氏によって、西行の新古今和歌集入集歌組み入れのための後に設定とされた場面が含まれないなどの特徴を有し、

むしろ『西行物語』の原型をうかがう重要な鍵を持つ本であるとする。

第二章「伝阿仏尼筆『西行物語』考」は、現存する『西行物語』中、最古のものと考えられてきた静嘉堂文庫蔵伝阿仏尼筆『西行物語』（A二）に関して、国語学の面から検討した高橋宏幸氏の論文を、伝阿仏尼筆本『西行物語』が、より時代の下る本である可能性を示されたものと捉えて、他の伝本との仮名文字遣の比較を通して書写年代についての再検討を加えている。

第三部は『西行物語』の諸本研究に関する論考である。

第一章は、立論に先立って、先行の諸本研究を要約、整理している。

第二章『『西行物語』諸本について』は、第一章をふまえて、五十の伝本を調査し、あらたな分類を試みたものである。各伝本の内容・筋・詞章の相違の程度により階層的に分類する故松本隆信氏の分類方法に立ち戻り、『西行物語』諸本を分類し直し、各分類毎の特徴及び各伝本の特徴を考察している。分類に際しては、西行の和歌が筋の骨格をなしていることを『西行物語』の特徴とする観点から、和歌の異同を基準としている。

第三章「諸本書誌等」は、諸本分類のために行なった調査の結果判明した書誌や、各本について、特記すべき事項を述べたものである。

第四部は、『西行物語』の展開の諸相を考察した三章からなる。

第一章「『西行物語絵巻』考―旧久保家本（サントリー美術館蔵）を中心に―」は、『西行物語』研究の中で取り残された形となっている詞書と絵との関連に関する考察を、旧久保家本（サントリー美術館蔵）を中心に行なっている。

第二章『『西行物語』の一系統「発心記」考―お茶の水図書館成簀堂文庫蔵『西行上人発心記』と神宮文庫蔵『西行法師発心記』との比較検討―』は、第三部において《甲類》A四に分類した「発心記」系のお茶の水図書館成簀堂文庫蔵『西行上人発心記』と神宮文庫蔵『西行法師発心記』、及び、神宮文庫本をもとに誤脱を補って翻書写された『西行全集』（文明社、昭和16年）所収『西行上人発心記』の三点を材料として、和歌を中心にした比較検討を行っている。

第三章「蓬左文庫蔵『西行上人絵詞』について」は、これまでほとんど取り上げられていない白描絵巻の欠を補う蓬左文庫蔵『西行上人絵詞』について伝来を中心に論じたものである。従来の『西行物語』研究において中心的に取り上げられてきた書陵部蔵文明12年写本は、「よしや君」歌の位置や岡部の宿の話を欠く等の問題を含んでおり、同じB類の諸本との関係の解明が必要だが、白描絵巻は善本と認められながら完本でないため、研究が進んでいない。蓬左文庫蔵『西行上人絵詞』はその白描絵巻の欠脱部を補う重要な資料であるとする。

附考二章のうち、第一章「伊勢貞丈自筆『西行記画卷物抜書』考―『座右書』及びサントリー美術館蔵白描『西行物語絵巻』との比較を通して―」は、新たに論者自身が入手することができた伊勢貞丈自筆『西行記画卷物抜書』を紹介し、貞丈が元にしたと考えられるサントリー美術館蔵白描『西行

物語絵巻』との比較検討を加えている。有職故実家と知られる伊勢貞丈が、奥書に「古物可信者也」と評価し、「仍武器馬具之所描写之耳。其外之所者皆佛事之絵也。故略之不写。画傍加注」と記した『西行記画卷物拔書』に施された注記についても検討している。

最後の、第二章「中川久盛室著『伊香保日記』について－慶應義塾大学図書館蔵本を中心に－」は、徳川家康の姪である中川久盛室の寛永十二（1639）年伊香保湯治の紀行文である『伊香保日記』に関する考察である。慶應義塾大学図書館蔵本は『西行絵詞』と合冊となっており、ともに桑名藩儒三宅澹庵が秘書役の侍史に書写させ自ら書き入れを行なっている。『西行物語』の享受の場についての考察の一端となっている。

論文審査の結果の要旨

平安末期に活躍した歌僧西行は、『新古今和歌集』に個人としてもっとも多数の和歌が採録されるなど、その後の歌道においてもきわめて重要な人物として遇されてきたが、その人物像の造型伝承にあっては、彼の動静を記した二つの作品、すなわち『撰集抄』と『西行物語』との及ぼした影響が大きい。

本論文はこのうち、写本の数が五十点を超え、その展開の諸相が多岐にわたる『西行物語』について、あるいは自ら新資料を入手し、あるいは海外にまで写本を求めて博搜して得た一つ一つの写本・版本を丁寧に調査し—その一端は資料編としてまとめられた二十五点にのぼる写本・版本の翻字に伺うことができる—『西行物語』の展開のありようを跡づけようとした労作である。

『西行物語』として括られて論じられている作品は、一見和歌の抜き書きのごとき簡明な形態のものから、仏教教理を展開する法語に連なるもの、さらに絵巻の形態を取るものまで、多岐にわたっている。それらは西行という人物を、それぞれの作品作者がいかに受容したかの軌跡にほかならない。

しかしながら論者もいうように、従来の研究では、もっとも分量が多く、もっとも多くの和歌を含む書陵部蔵文明12年本のみを取り上げて論じる傾向が強い。論者の立場はそれぞれの写本に同じく作品としての価値を認め、その相互関係を理解しようとするもので、近年の研究動向に従って順当なものである。

手順としてもこれまでは、昭和16（1941）年、文明社発行の『西行全集』（昭和56（1981）年に再刊）に所収される六種の『西行物語』が無批判に使用されるなどの混乱があった。論者は、同書は諸本をそのまま翻刻することを目的とせず、類似した本によって誤脱を補い、できるだけ正しい本文を提供するという方針がとられており、本来底本にない話や和歌が多々挿入されていることを指摘している。こうした状況から、論者の研究はまずもって各地に散在する諸本の一つ一つについて、写真を入手し、正確な翻字を行うというもっとも基礎的なところからはじめなければならなかった。

論文編は全四部および附章、総計十四論文からなっている。

第一部「西行の和歌と旅」は、『西行物語』と『撰集抄』との比較、西行の詠じた和歌及び旅を起点として『西行物語』の特質について考察した四章からなる。

第一章「『西行物語』と『撰集抄』—和歌の扱いを中心に—」は、『西行物語』においては、西行の和歌が筋の骨格をなし、話の結びの役割を果たすのに対し、語り手として西行を仮託する『撰集抄』においては、語り手西行が各地で見聞したことを書き記し、結縁をなすことに重点が置かれるという。そこから『西行物語』の構造として、歌集における詞書と和歌との関係が見られるとした。首肯すべ

き論である。

第二章「西行の和歌観をめぐって」は、西行の和歌に対する同時代人の評価と『沙石集』等による西行の和歌観を通覧し、その上で、『撰集抄』において、語り手西行が和歌を詠じる場面が数えるほどしかなく、しかも語り手が詠じた和歌のうち実際の西行歌が半数にもみないのは、『撰集抄』編者が語り手としての西行に求めたことが、心を澄ます一手段として和歌を捉え後世を願う態度であったためと考えられるという。『撰集抄』論として納得できるものである。

第三章「『西行物語』における和歌観をめぐって」では、第二章での『撰集抄』の分析と比較対照する形で、『西行物語』諸本における和歌に対する考え方が検討されている。吉野・熊野・大峰への修行の旅の記述がない《甲類》諸本は、和歌を詠ずる西行とその西行の往生に対する素朴な感動を描くことを意図したものと考えられるのに対し、《乙類》諸本は、和歌を詠ずることを仏道修行と捉え、その修行に読者を導くという意図を様々な度合いで付加したものと考えられるとするが、ならばそれは成立において『撰集抄』とどのような関係にあるのかについて語られていないのは残念である。また、以上の第二章、第三章においては、いずれにおいても、歌人西行と仏道修行者西行の対立という二元的・図式的解釈に、若干とられすぎの感があり、表現に即したより柔軟な西行像を把握するまでには至っていない点が惜しまれる。

第四章「西行の旅」は、『西行物語絵巻』諸本の絵と詞章を比較検討する。詞章と絵との相関の研究は、『西行物語』の場合必須であるが、いまだ十全になされているとはいえない。第四部第一章以下の分析ともども、論者にとっての今後の研究のモデルケースともなるべきものである。阿仏尼や芭蕉など後代の人々が、自らの旅の途上で「心細し」と思い起こした西行の旅のイメージは、『西行物語絵巻』に基づくのではないかとするのもうなずかれる説である。その「心細さ」の内実の歴史的分析など、今後の研究に期待したい。

第二部は、『西行物語』の原型を論じた二章からなり、第三部での分類案の提示とともに、本論文の中でももっとも中心的な部分ということができる。

第一章「天理図書館蔵『西行法師集歌』について」は、従来単なる抜書きにすぎないと見られてきた該書について、むしろ『西行物語』の原態がうかがえることを考証した、重要な論である。「西行歌集」のごとき書名を持つ当書は、従来、諸本研究においても等閑視されていたが、旅の記述や妻子の登場の有無、『発心集』などの先行説話の影響の見られないことなど、『西行物語』の原型を考える上で極めて重要な一本であるとの指摘は説得力を持ち、西行関係書籍を博搜した著者においてはじめてなした貴重な発言である。

第二章「伝阿仏尼筆『西行物語』考」は、第一章とは反対に、『西行物語』中、これまで最古の鎌倉時代書写本であるとされてきた静嘉堂文庫蔵伝阿仏尼筆『西行物語』を再吟味し、この写本の後代性について検討している。自らプログラムを組んで、各種写本資料の画像データを抽出し、字母の比

較検討を行っており、新しい研究方法を追求模索したものとして高く評価することができる。一方で、検討すべき問題点はまだまだ多く、総合的な再吟味には至っていないことも事実である。

また、そうした段階にあることもあって、慎重な論者は、「天理図書館」本や「伝阿仏尼本」の諸本間における位置付けについて上記以上の発言を控えており、本論文に於いては、これらの書を一つの基準にしての諸本論を総体的に把握するまでには及んでいない。より詳細な、内容と文章表現の分析をもって今後の成果が期待されるところである。

第三部は『西行物語』の諸本研究に関してまとめた三章からなり、その中心は、第二章「『西行物語』諸本について」である。ここでは論者が実際に調査し得た五十の伝本について分類を行っている。修士論文提出から十年の年月をかけて、自ら写本を購入し、海外にまで足を運んで行われた調査の集積となっており、重要な成果である。

第一章で、これまでの先学の分類についても広く目を配り、第三章では書誌、特記事項についての注釈も加えており、広く学会に対して提起された新分類として、今後広く論議検討されるべきものと考えている。

第四部は、『西行物語』の展開の諸相を考察した三章からなるが、第一部第四章とともに、写本のみならず絵巻なども視野におさめ、多様な伝本のそれぞれのあり方を考察した点に、従来の国文学研究の枠内に留まることのない、学際的な新しい可能性を感じさせるものとなっている。

第一章「『西行物語絵巻』考―旧久保家本（サントリー美術館蔵）を中心に―」は、従来その存在は知られていながら、きちんとした作品紹介のなされたことのない旧久保家本を取り上げ、その特質をはじめ明らかにした。詞書と画面構成の両面にわたる氏の周到な考察は、国文学と美術史学を架橋する新たな絵巻物研究の視座の構築を予感させるものがあり、高く評価してよい。

第三章「蓬左文庫蔵『西行上人絵詞』について」においても、書陵部蔵文明12年写本と同じB類の善本と認められながら完本でないため、これまでほとんど取り上げられていない「白描絵巻」について研究を進め、その欠を補う蓬左文庫蔵『西行上人絵詞』について伝来を中心に基礎的事項を整理している。手堅い論であり、今後「白描絵巻」の研究を進める上での基盤をなすものである。

本論文は長い年月をかけて丹念に整理された基礎的労作であり、今後の『西行物語』研究において、かならず参照すべきものである。「天理図書館本」の再評価、「伝阿仏尼本」の再吟味を通じて、新分類を提示し、抄出本とされて軽視されてきた《甲類》系諸本の意味を再確認させた功績は大きい。

諸本の検討がいまだ不十分な学会状況の中で、正確で詳細な翻刻分析がなされていることは、高く評価されるべきである。また、自らプログラムを組んで、分析資料を整えるなど積極的な研究方法には見るべきものが多い。さらに、絵画と詞章との関係への踏み込みは学際的な研究として今後の進展が強く期待される。

この博士論文で蓄積整理された事項の成果の上で、『西行物語』世界についての縦横な研究が積み

重ねられていくことが強く期待される。